

『神にできない事は何一つない』

聖書 ルカによる福音書 1章 26～38節 讃美歌 7 231 236 241 28

説教 森田幸男牧師

今日私たちが共に読みます聖書の箇所は、四字の漢字では、『受胎告知』とこのように言われてきた箇所であります。ヨセフと婚約中でありましたマリアに、天使ガブリエルが臨んで、マリアが身ごもることを、しかも救い主を身ごもることを告知した箇所であります。

私たちが先週共に読みましたのは、主イエス・キリストよりも6か月前、今日の箇所にも「6か月目に」とありますけれども、この受胎告知の6か月前、天使ガブリエルがザカリアに臨んで、洗礼者ヨハネがエリサベトから生まれることを告知した箇所でした。

今日の箇所は『受胎告知』であると同時に『処女降誕』を示す箇所でもあります。「まだ男の人を知りませんが」とマリアは言っております。まだ婚約中の身でありまして、処女であるマリアが身ごもって、イエス様が誕生すると、こういうことで『処女降誕』というその事実の前に私たちは今いることになるわけであります。洗礼者ヨハネの誕生の場合は、今日の箇所にもガブリエルが申しておりますが、「あなたの親類のエリサベトも、年を取っているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう6か月になっている。神にできないことは何一つない。」このように天使はマリアに申しております。

このパプテスマのヨハネの誕生の場合は、両親とも高齢です。私たちの教会で高齢といえれば80歳以上になりますから、彼らの場合は老齢と言ったらいいのでしょうか、かなりの年になっていて、もう子供が与えられるということは諦めるほかない、そういう年齢に達していた時に、神様の御心によってヨハネが誕生するというものであります。

私たちはこの誕生については奇跡的な誕生であったと言ったらいいでしょうか。祖先アブラハムとサライが超高齢になって一人子イサクを与えられたことを思い起こしますが、正に奇跡的な誕生であったと言うことができますが、受け入れることはできると思います。

けれども今日の箇所の場合はどうでしょう。私たちは毎年クリスマスの時期になると、この『処女降誕』の箇所にふれます。このことについては、「信じるもよし、信じなくともよし」というふうな理解ある注解者は結構多いのであります。

しかし私たちは、今日も、「処女(おとめ)マリアより生れ、」と、このように告白したことであります。その意味と事実を、私たちはもう一度この聖書を読み、この事に秘められている神の恵みを、改めて受け取めたく思います。

それで、私たちはこのようにヨハネの誕生とか、イエス様の誕生ということについて、これを「奇跡的」或いは「奇跡」と、こういうふうに言うわけであります。その意味するところは、神様の御心と御力による出来事を、私たちは「奇跡的」或いは「奇跡」というふうに言っているわけですが、わたしは先週、ヨハネの誕生告知の箇所を読み

ながら思っていたことがあります。このヨハネは、決してこのわたしと別人ではないのだと。そういう思いでヨハネの誕生の告知、そしてやがての誕生のことをずっと思っていました。今もそうです。そしてこの『処女降誕』ということについても、これはマリアのことであると同時にわたし自身のことでもある。そういうふうに思っているのです。

ヨハネの誕生についてでありますけれども、あのように年離れた両親から生まれたわけですけれども、私たちの中にも高齢の両親から生まれたという人もいなくはありません。わたしの場合は、母親の二十歳の子です。ですからこれまで丈夫で元気に過ごしてきました。けれども考えてみますと、私たちが今このように在るといことは、省みれば、今わたしがここに存在するといことは、これは奇蹟的と言うよりはもう奇蹟と言う方が事実的に即して正確ではないかと思うのです。

聖書に依りますと、人類の祖のアダムとイブの誕生、神による創造という出来事は、聖書の系図から逆算しますと、数千年前のことです。アダムとイブの誕生、創造は数千年前なんですね。今日そんなことを言えば、子供にも笑われますね。そしてインターネットなどで検索しますと、人類が、チンパンジーの先祖からチンパンジーと人間に分かれた時期は、今から数百万年前と言うわけです。科学的にはこちらの方がより正確だと思います。六百万年前から七百万年前となっています。百万年も差があるわけですから、こんな曖昧な言い方はないのですけれども、しかしその数百万年前にチンパンジーの先祖と人類の先祖が枝分かれして今の人類がある。まあこういうことであります。

地球の誕生はいつなのかというと、四十六億年前ということ。どれくらい昔なのか、皆目検討が付きません。しかし今では、四十六億年前にできた地球も月から眺められる時代になりました。ただ一般人が月に行くには物すごい費用がかかるので、私たちにはまだまだ遠い話であります。四十六億年前の地球を見るのはちょっと無理ですが、今日の礼拝後に、三億年前にできたものを皆さんに手に取って見て頂こうと思っています。三億年前にヒマラヤ山上にできた岩塩のランプです。先週ある人がもってきてくれたのです。

そういうふうにチンパンジーから分かれて数百万年も経っています。人類の原産地はアフリカと言われていますが、それがずーっと来て、私たちが今在るのではないのでしょうか。この間に洪水もありますし、飢饉もありますし、そして近年戦争もいっぱいありました。けれども、そういうところを私たちの先祖は、親たちは、正に生き延びて、そして私たちが今・ここに在る。この事実を疑う方はあるのでしょうか。そうならば、我々の存在は奇蹟的なのです。先祖が生き延びることがずーっと重なって重なって重なって、今の私たちが此処にあるというのは、正に奇蹟的という位の表現では足りないのではないのでしょうか。

そうしますと、ヨハネの誕生とその存在は奇蹟的だと先ほど言ったのですけれども、そのヨハネの存在と比べて私たちの存在は遜色があるのでしょうか。同格と言っていいと思うんですね。ヨハネと私たちの違いというのはたった二千年なんですよ。四十六億年の歴史に比べれば、それはもうあってないようなものです。人類の始めについても、百万年の違いぐらいどうってことはないわけですから、二千年ぐらいの違いは一瞬にして越えられる

わけです。いずれにしても共通しているのは、わたしたちの存在というのは、その点に限っても奇跡的なわけです。

それで今日の婚約者ヨセフとマリアは、当時の結婚の習慣からしますと、十代の後半です。いわゆるハイティーンなんですね。婚約してしまして、間もなく結婚するというその直前に、婚約者のマリアがヨセフの子でない子を身ごもったという出来事が起こったわけです。これは彼らにとっては、どうしようもない、克服困難な大変な試練でありました。

そういう数々の試練が私たちの人生にはあります。日常的にあります。今後もあります。死ぬまであります。そうなのでありますけれども、何と云っても私たちは今・ここに在るわけです。ですから、誰かが言っていましたように、「体も弱い、病気もするし、色々な不足があるのが我々の現実だが、とりあえず生きているのだから文句を言うな」というのは、なかなか強い言葉ですが、言い得ていますね。それもそうだと思いますね。そういうかけがえのない命がわたしののです。ですからヨハネは私たちから遠い人ではありません。

ただいま神田長老のお祈りにもありましたが、今年の私たちの歩みは、喜びと悲しみの両極を経験した年でありました。そういうことで、この点でもわたしたちはヨハネと同格、そしてヨセフとマリアとも私たちは同格だと思います。そういう中で、この試練の中に突き落とされた若いヨセフとマリアを支えたものは一体何であったか。それは神の御告げなんです。神の御言葉だけなんです。それは夢の中で聞いた言葉、でもその神の言葉だけがこの二人を支えたのです。そしてそれは私たちの場合でも同じです。いろんなことがありますけれども、何が本当に私たちを支えてくれるのか。神の御言葉だけあります。

そのように私たちも悲しみと試練に遭ったわけですが、本当に支えてくれたのは神の言葉でありました。もし御言葉がなければ、このようにはおれなかったかもしれません。そのようなことで、私たちと聖書の人物は近いのです。たかだか二千年前の人であります。わたしたちが試練を通して与えられたことは、彼らが“他人ではない”という認識であります。新聞の三面記事、今なら三面ではなく三十何頁に出ているような記事、今日もこんな事がありました、昨日もこんな事がありましたというような記事も、もう遠い記事ではなくなりました。他人事ではなくなった。だからわたしは新聞の読み方が変わりました。そして当時の新聞と言ったらいいでしょうか、この良き知らせの新聞と言ったらいいでしょうか、聖書、これも遠いものではなくなった。或いは聖書の人物が近い人になった。それが神様の恵みと言ってよいと思います。事物との距離が非常に近くなったのです。

さて、今日の箇所であります。この時期には私たちはクリスマスの讃美歌を歌い、クリスマスソングを聞きますが、「アヴェ・マリア」という歌も耳にすることが多い。しかし、もっと「アヴェ・マリア」など流れていい。たくさん曲があるのですから、世界の音楽家がこの「アヴェ・マリア」という歌詞で沢山の曲を作っているのですから。もっとこの歌がこのクリスマスシーズンにこそ流れるのが相応しいと思いますね。

というのは、今日の28節の天使の言葉、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」これが歌詞になっているわけですね。もう一つは、今日の次のところですが、

エリサベトが訪ねて来たマリアに言った言葉、42 節、「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。」これが引き抜かれてなったのが、「アヴェ・マリア」の歌詞なんですね。ですから本当にこの時期に歌われてこそ相応しい歌であります。

ただカトリック教会ではその後、いろんなものがカトリックの考え方に応じて聖書にない言葉が付け足されていきますね。もともとの歌詞は、天使がマリアに語った言葉ですね。ところがその後変化して、今度は、信者がマリアさんに執り成しを願う祈りにするという歌詞が付加されて行くわけです。文語訳ですと、「天主の御母。聖マリア、罪人なるわれらのために、今も、臨終のときも、祈りたまえ。アーメン」こういう言葉が付加されています。これは聖書にない言葉ですが、カトリック的な伝統の中で付加されて行ったわけです。だから新しいものにはこういう言葉がついていますが、もっと古い「アヴェ・マリア」にはもっとシンプルに聖書の言葉だけなんですね。だから天使が言った言葉が、今度は信者がマリアさんをお願いするという歌詞に変わっているわけです。

しかしこのことは、わたしは面白いことだと思うんですね。私たちは純粋に聖書の言葉だけならば、「アヴェ・マリア」をプロテスタントの教会でももっと歌えばいい。けれども余計なものが付いているから、歌うのがはばかれるということがあります。でも私たちは今年5月のペンテコステの時に、献堂記念コンサートをして、日本人の鈴木憲夫さんが作曲した、「アヴェ・マリア」を、この礼拝堂で聞いたのですね。あれは私は、“良いな”と思いました。これまで聞いてきた数々の「アヴェ・マリア」とは一味違う。日本人が作曲した「アヴェ・マリア」は、西欧のものに負けていない。あるいはこの方が日本人には迫るなという感想さえ持ったのです。

そうなりますと、私たちはこの付加が付いた「アヴェ・マリア」はカトリックの歌であるけれども、これは我々プロテスタントの歌ではないかと、一応こうなりますけれども、そのようにマリアに執り成しをお祈りをするという人間の気持ち、これは否定さるべきものでしょうか。

丁度木内正子さんが亡くなったあの次の礼拝の時に、私の中学校時代の友達がこの礼拝に来るはずだったのです。その人はクリスチャンではありませんが、米子の伝道所に時々出ている友達ですが、私の親友が脳梗塞で倒れて半身不随になっているのですが、その共通の友達のために「森田さんの教会に行って、お祈りしてあげたい」と言ってきました。その人はキリスト教の信仰はまだ持っていませんが、そういうことで来るはずだったのですが、木内姉の事件もあり、一緒に来るはずだったもう一人の友達が骨折するということがあって、結局来れませんでした。けれども、何かやっぱりこう人間の力で及ばない時は、神様にすがりたい。或いは徳のある人に仲立ちをしてもらって、という気持ちは、人間としては自然ではないでしょうか。

私たちはキリスト教というのはご利益宗教ではないと、時にちょっと高見からものを言うことがあります。本当にそうなんです。でもそれはご利益がないなどと言っているわけではないのです。ご利益と言う、そのような表現では余りにも言い尽くせないご利益を頂

いているからという意味において、キリスト教はご利益宗教ではないと言っているのです。或いは天寿を全うしたい、しかも死ぬ時はぼっくりと死にたいと思っても、そうはいかないわけですね。“そうはいきませんよ”ということ私たちは今年思い知らされたのです。けれども、たとえ終りがどうであっても、そんなことで微動だにしない祝福、救いがわたしたちにはあります、ということ私たちは心から信じているわけです。けれども、マリアさんをつてに頼って、だってマリアさんは神の御子のお母さんなんですから、つてを頼るとすれば、マリアさんがある意味では一番自然なんですね。イエス様ご自身にすべて根源があるにしても、そのイエス様をお産みになった母マリアさまに縋るとするのは、人間的にはよく理解できることだと思います。それが「アヴェ・マリア」の付加部分の歌詞にはそうなっているわけです。

私たちが人に相談をする時には、自分ではどうにもならないけれども、あの人は同じような試練をくぐって今のこの境地、喜ばしい状態におられるから、一体どうしてあの人は今のこのような状態になられたのか、あの人に相談したら何かヒントを得ることができるのではないかと、私たちがそういう人がいれば相談に行くのではないのでしょうか。ですから、相談できる相手がマリアさん一人だけだというのはちょっと寂しいですね。私たち一人一人がマリアさんと同格になって、相談される人、「私はまだキリスト教のことがよく分かりませんが、クリスチャンとして先に行っておられる皆さんは本当に祝福を受けておられるのですから、わたしのような者もどうかこの道に導かれて、その祝福にあずかれますように手ほどきなり、お導きをお願いします」と私たちは頼まれる人に、やはりなれると思うのです。そういう祝福をわたしたちは頂いているわけですね。

そうすると、私たちの祈りの課題になりますね。すると、マリアさんとどう違うのでしょうか。ガブリエルが言った「おめでとう」というのは、前にも申しましたが、「喜びなさい」というのがもとのギリシャ語で、「何故なら、あなたは恵まれた方です。」「恵まれる」というのは、どういうことか。「主があなたと共におられます」というのが、この「アヴェ・マリア」の冒頭のセリフなんです。するとこれはマリアさんのことでもありますけれども、私たちのことでもあるのではないのでしょうか。「恵まれた人、主と共におられます」と、これはもう私たちの口癖になるぐらいに、感謝を持ってこのことを覚えていますね。ここにこそ、私たちに喜びがあるわけですから、天使ガブリエルがマリアさんに言ったそのことは、私たちのことでもあるわけです。

そういう恵みをいただいた者として、主が本当に共にいてくださる方として、そして、洗礼の恵みを通して主と一体にされ、主と結ばれた者として、「マリアさま。今も、臨終の時も、この罪人、わたしのために御祈りください」と、こういうふうに歌い、願うのですが、私たち一人一人がそのマリアさんと同じ、そういう者とされているということではないのでしょうか。それなら同格なんですね。

私たちは、時に厳格に、聖書の言葉にいかなる付加もしてはならないと言いますね。精神としては全くその通りですね。しかし、聖書の言葉に何か人間の言葉を一切付加しては

ならないということになれば、説教することはできないですね

ですから今の「アヴェ・マリア」の付加部分についても、そのようなことで止まったら、もう進展がないわけです。でもこれを自分自身の身に置くところまで、私たちは進まないといけないと思うのです。ですから信仰的には、これらを拒否するでは、ちょっと遅れている。聖書の人物も遠い。従って彼らが受けた恵みからも遠いというようなことになってしまうと思うのです。

この秋からNHKで、「ちりとてちん」という朝の連続テレビ小説をしています。落語が主題なんですけれども、あれに出てくる主人公の娘さんは福井県の小浜、若狭の出身なのですが、私はあのお母さんにとっても惹かれるのです。この間も家の近くのお地蔵さんにお百度踏んでお祈りしていますね。「娘の喜代美が立派な落語家さんになれますように」と、一生懸命にお願いしています。何とも身につまされますよね。親が子を思うその思いというのが溢れているわけです。そして祈られている娘の喜代美が、小さい時に大好きな若狭塗箆職人の御祖父ちゃんが死んで悲しくて、母親と梅丈岳の山頂公園で「かわらけ(土器)投げ」をして、一生懸命お願いするシーンがありましたね。若狭弁で言っていました。「もういっぺんおじいちゃんに会えますようにー」「おじいちゃんが天国に行けますようにー」「おじいちゃんが天国で幸せになりますようにー」「おじいちゃんが天国で笑ってますようにー」。ああいう姿は、キリスト教の神様にお祈りしていないからあかんと言うのでは、人情に欠けますね。「おじいちゃんが天国に行けますようにー」「喜代美が元気で、立派な落語家さんになれますようにー」。一生懸命祈っているのです。身につまされますね。

先ほどの神田長老の冒頭の御祈りの中にも、「本当に私たち平和でありますように。この教会において満ち溢れている特にこのクリスマスの恵みに皆さんがあずかれますように」というお祈りを捧げられました。本当に数々のご利益があるのですから、私たちはお祈りすればいいのです。そして神様はその上で、わたしにとっても、隣の人にとっても最良の答えを導き出してくださるのです。ですから遠慮することはないのです。娘が結婚できますように、いい人が見つかりますように、と思わない親はいないのですよね。そんなご利益的な御祈りはいけません、なんてことはないと思うのです。だってパウロも、「この病を治してください、治してください、治してください」と何度も御祈りしたと言っているではないですか。イエス様も、「この盃を取りのけてください、この盃をとりのけてください、この盃を取りのけてください」と、ゲッセマネの園で何度もお祈りされたではありませんか。

そして今日のそういう遣り取りがあって、マリアはびっくりするようなお告げを受けるわけであります。こんなことは直ちにであっても、何年経っても、容易には信じがたいことがその身に起こるといってお告げに、驚きもし、恐れもし、まして、「わたしはまだ男の人を知りませんのに」と言います。そういう恐れ、驚きの中でほとぼしり出た言葉だと思えますけれども、「『聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。あなたの親類のエリサベトも、年を取っているが、男

の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。神にできないことは何一つない。』マリアは言った。『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。』そこで天使は去って行った。」こうあります。

このようにマリアは、そのような驚きの中で、「御言葉どおり、この身に成りますように」というふうに申しました。マリアは、人知を超える神の計らいのあることを信じたのです。先祖のアブラハムの信仰を思い起こしたでしょう。けれどもこの少女マリアの、「御言葉どおり、この身に成りますように」という信仰には、あのアブラハムでさえ、こういう信仰に入っていくには大分かかりました。マリアはある意味では瞬時にずっとその中に入るのですから、これはマリアの信心とか信仰が深かったと、そういうことではなくて、聖霊が彼女に臨み、御子と共に信仰をも賜ったのです。生ける神が彼女に臨んだ。それ以外ではありません。そして人知を超える神の計らい、導きのあることを、彼女は信じたわけです。

これは天使の言葉ですけれども、「神にはできないことは何一つない」というガブリエルのこの言葉も信じた。そして、マリアの願いからすれば、ヨセフと幸せな結婚式を挙げて、その上で、イエス様のような良い子が与えられてほしいというのが自然な願いですけれども、もうそういう少女の願いは破られて、「御言葉どおり、この身に成りますように」と言う時には、「わたしの願いではなく、あなたの御心が成りますように」という、ゲッセマネの園のイエス様の祈りと一つになっていると言うことができます。

それで、これは何回申し上げたかしのれないことですがけれども、最後に申し上げたい言葉があります。敬愛するカール・バルトの言葉ですけれども、彼がこう言っているのです。戦後、最初の使徒信条の講解、私たちが今日告白した使徒信条の講解を戦後1946年に、戦中はボン大学の教授でしたけれども、「ハイル・ヒトラー」と手を挙げてする宣誓を拒否したので、「そんな者は本国に帰れ」と言われて、スイスに帰らざるを得なくなったのです。戦中はずっとスイスで過ごして、戦後もう一度ボン大学に戻って、最初にしたのが、使徒信条の講解だったのです。それが本になったものが『教義学要綱』という本で、その中の「我は聖霊を信ず」の中で、彼はこう言っています。

「ここに一人のキリスト者がいるという事実……それは聖霊と処女マリアからイエス・キリストが生まれ給うたという事実よりも、また、世界の無からの創造という事実よりも小さい奇跡ではない。」

これは何度か申し上げて来ましたが、何となく記憶にあるけれども、何を言っているのか分からないという方もあるかもしれません。「処女降誕」、これは奇跡です。天地万物の無からの創造、これも神の為さった奇跡です。同じように、このような聖書の告知を信じるというキリスト者がここにいるということは、それよりも小さい奇跡ではありませんと、バルトは言っているわけです。ですからこういう信仰を持つということは、その信仰を信ずる者に聖霊が降って、聖霊に包まれて、本当にこの恵みの中に引き入れられて、「われ信ず」ということになるわけです。ですから私たちは勿論、祈りにおいて、どんなにか切実な祈りをせざるを得ない。します。それでいいわけですね。そして、祈ることは

決してむなしくならない。そういう神様を信じる者とされているというこの信仰の事実は、奇蹟なんです。そしてこの中に、すべての祝福、ご利益が実は含まれております。そして神様は時に相応しくわたしにその恵みを施してくださる。そして、更なる信仰の深みへと導いてくださる。

もうこの世界に、あなたにとって他人なんていませんよ。あの悲しみの人と、あなたの悲しみは一つですよ。あの病む人と、病んでいるあなたとは一つですよ。あの人がいやされたように、あなたも癒されますよ。私たちは個々に個性ある人生を生きていますから、恵みもやはり個性的に相応しく与えられる時があるわけですね。一律にはいかないのです。そういうふうに細やかに配慮してくださる神様を信じる。イエス様を信じる。聖霊なる神様を信じる。こういう信仰に、私たちは入れられて、今・此処ここにあるわけですから、さっきの、我々の存在そのものが奇蹟ならば、我々がキリスト者として今・此処あるというのは、それ以上の奇蹟なんですね。神学者は、理屈も言い、筋の通った話もしないといけません、その根源には、自分の存在そのもと、そういう者がこの信仰を与えられているということが、もう正に奇蹟の中の奇蹟なのだという驚きと感謝がなければなりません。私たちはただこういう神学者を尊敬するだけではなくて、バルトと同格の、同質の、同レベルの信仰を私たちも持っているわけです。

ですから、私たちもあの『アヴェ・マリア』の付加された言葉ではありませんけれども、私たちもこの信仰を与えられていますから、人々を執り成すことができますし、もっと執り成しに生きなければなりません。真剣な祈りが無いといけないのではないのでしょうか。「世界の人々が信仰を持たれますように。」「本当に皆が仲良く暮らせますように。」「皆が希望を持って生きられますように。」そういう祈りを捧げることができる神様に私たちは出会った。捉えられ、信仰を与えられたわけです。

ですから、このような執り成しの祈りを私たちが欠かしては、お百度まいりをしているあのお母さんに負けると思うのです。あの熱心さ、切実さを私たちのものにしなければなりません。と思います。

御祈りいたします。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの御名があがめられますように。

そして私たちの信仰が本当に愛と希望に満ちたものとなりますように。

そして一人でも多くの人々が、私たちと一つなる信仰に入れられますように。

どうかそのためにこの貧しい私たちを、あなたが用い、働かせてくださいますように。

心からお願いいたします。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン